

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：32634

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24730125

研究課題名(和文)「社会」観における伝統と近代 明治前期の「統治」と「社会」

研究課題名(英文) Tradition and modernity in the view of "society": "Government" and "Society" in the Meiji Era

研究代表者

菅原 光 (Sugawara, Hikaru)

専修大学・法学部・教授

研究者番号：90405481

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：「社会」という用語の成立に大きな影響を与えた原語として、英語の"society"並びオランダ語の"matschappij"を、伝統的背景として伊藤仁斎、荻生徂徠らの「社会」観とを視野に入れながら、国家領域と社会領域との両者を同時に建設しなければならなかったという、明治前期の思想家達が直面していた現実を踏まえた上で、「社会」という概念が輸入されたことの意味を解明した。

研究成果の概要(英文)：I examined the extremely difficult task which Thinkers of the early Meiji Era had to face. That is to say they had to build a new nation and new society at the same time. Considering this issue, I brought "society" in English and "matschappij" in Dutch as the original term and observations on the "society" by 伊藤仁斎 and 荻生徂徠 as a traditional background.

研究分野：日本政治思想史

キーワード：思想史 政治学 政治思想史 法秩序論 社会 明治政治史 統治論

## 1. 研究開始当初の背景

近代になってはじめて、「国家」とは区別された「社会」という概念が西洋からもたらされ、日本の中にも徐々に「社会」という領域が発見されていくという過程については既に、石田雄『日本の社会科学』、飯田泰三『批判精神の軌跡』、有馬学『「国際化」の中の帝国日本』などの優れた業績があった。大正期における知識人層を対象とした「社会の発見」論は、その大きな成果である。しかし、「社会が発見」されたのが大正期以降のこととされたことは、明治の「社会」論研究を手薄にさせる結果につながっていた。その結果、「社会」概念は、当時の日本人にとっては全くの未知のものとして、西洋から直輸入された概念として捉えられることにもなった。

申請者は「明治政治思想史における法秩序論の位相」(平成 19～22 年度、若手研究(B))において、西周や福澤諭吉らの法秩序論を検討するにあたり、江戸時代の儒教思想並びに現実の社会政策論を調査してきた。そこで明らかになったのは、江戸期の思想家達も「社会」に相当する現実を捉え、考察していたということである。西周が society の訳語として借用したのは「相愛生養」という江戸中期の儒者、荻生徂徠が用いていた用語でもあった。つまり、西洋からもたらされた「社会」概念は、日本の知的伝統の中に位置付けて意図的に読み替えられつつ受容されたのである。本研究は第一に、「社会」概念における伝統を重視するという意識を強く持つことを特徴としてきた。

第二に、江戸時代の現実においては、「社会」領域だけではなく「国家」領域もまた成立していたわけではなく、明治という時代は、両領域が同時進行的に発見された時代であった。猪原透「社会の

発見」再考」(立命館大学人文科学研究所紀要、96号)が述べるように、「国家」領域からの「社会」領域の分離、独立こそが近代社会の指標であるという前提に捉われ過ぎ、その観点から思想を裁断しようとする傾向を有していた従来の研究は、両領域を同時に建設しなければならないという明治前期の思想家達が直面した難問の意味を見落としてきた。

この点の反省を踏まえ、近代日本の「社会」研究のためには、特定の「社会観」のみを前提にせず、西洋における「社会観」をも複数形で捉えた上で、前史としての江戸期を含む明治期を視野に入れた考察を行う必要が有ることを認識した。そこで、以下2つの観点を重視することにした。

(1) 明治の思想家達が「社会」並びに「国家」という概念を理解する際に背景となったものを、江戸の知的文脈の中に見出し、それとの対比の中から彼らの「社会」観の特徴を捉え直すこと。

(2) 「社会」の自立こそを近代社会成立の指標とする理解を一度括弧にいれ、19世紀ヨーロッパの「社会」観そのものを問い直すこと。特に、幕末明治期の思想家達が最初に触れた西洋の「社会」観として、オランダ語の“maatschappij”の意味を調査、検討すること。

## 2. 研究の目的

本研究は、明治政治思想史を「社会」という用語の成立過程という視点から捉え直すことを目的としてきた。特に、その用語の成立に大きな影響を与えた原語として英語の“society”、オランダ語の“maatschappij”を、伝統的背景として伊藤仁斎、荻生徂徠における「社会」に相当する現実についての議論とを重要な考察要素とし、単なる用語成立史の解明に止まらない、明治時代における社

会論と統治論との位相を明らかにすることが目的であった。

### 3. 研究の方法

「社会」という用語が確定する以前に、“society”ないし“maatschappij”という語と向き合い、それをどのような日本語でそれを表現するかという問題に直面した福澤諭吉、津田真道、西周、中村正直、森有礼、福地桜痴らの苦闘の軌跡を跡付けてきた。第一に、従来の研究において手薄だった、オランダにおける“maatschappij”の、特に津田・西らが直接師事したフィッセリングにおけるその特徴をライデン大学図書館貴重書コーナー所蔵の史料を中心に考察した。第二に、「社会」という用語確定以前に、訳語選定の際に背景的知識となっていた伊藤仁斎、荻生徂徠における「社会」に相当する現実についての議論を、その統治観との関係において調査した。第三に、前二者の「社会」観を二つの軸としつつ、明治前期の思想家達それぞれの「社会」観を考察した。

### 4. 研究成果

本研究は、従来の明治思想研究は、国家ないしは政府領域とは区別された民間領域の重要性を強調することこそが政治学の役割であるとする前提にこだわり過ぎてきたのではないかという仮説に基づいて調査、考察を進めてきた。それ故、「社会」という概念も、明治以前には存在しなかった理想の概念としてのみ捉えられ、それがいかに誤解され、現代に至るまで、日本には根付いていないという、欠如論として展開され過ぎてきたように思う。

そのような問題を感じながら「社会」論を振り返るための重要な作業として、縦軸としての江戸の思想、横軸としての同時代の西洋の思想にも重大な関心を払ってきたが、例えば、江戸時代の思想家達における「社会」的なるものの捉え方として、伊

藤仁斎は、民間領域における分業(家職)に基づいた秩序の重要性を強調していたこと、それをある面では継承したと言い得る荻生徂徠は、さらに分業という発想も分業の具体的なあり方も、統治によってこそ実現したものの、されるものとして捉え直していたことが明らかになった。あるいはまた、明治期における「社会」論の成立に重要な役割を果たした、西周、津田真道のオランダ留学時代の指導教員であったS.フィッセリングは、社会領域における自由の意義を強調する思想家であったが、同時にそのためにこそ、彼が大蔵大臣として行う制度設計に細心の注意を払っていたことが明らかになった。

これらの事例からは、「社会」は統治との関連で理解され考察されていたということが分かってくる。あるいは少なくとも、そのように理解した方が、より豊かな知見に到達できると考えられる。

中村正直はsocietyの訳語として「仲間之会所」を用いる時と「政府」を用いることもあり、国家領域と社会領域との区別が曖昧であるか、結局のところ、国家によって制御されるものとしてしか「社会」を認識していないものとして批判的に捉えられてきた。しかし、江戸以来の「社会」論の中にこの議論、フィッセリングに見られるような同時代の西洋における「社会」の捉え方の中に位置付けて考え直してみるならば、「国家」領域と「社会」領域との両者を同時に建設しなければならなかったという、明治前期の思想家達が直面した難問の存在にこそ目を向けるべきである。

以上のような調査、考察の結果、「国家」か「社会」かという二者択一的な視点に陥らず、「社会」の自立性ばかりを排他的に評価する立場に固執することなしに「社会」概念の意義をフラットに捉え直す必要があることが明らかとなった。

その具体的な成果は、下記の「主な発表論文等」、「学会発表」で公表済みである。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

菅原光「[書評] 軍事をめぐる政治思想 『軍事と公論 明治元老院の政治思想』(尾原宏之)」(『政治思想研究』第 15 号)、査読なし、2015 年、402-403 頁。

Hikaru Sugawara, Multiculturalism and Language : Focusing Around the “哲学” as a Translation for “Philosophy” in *The Korean Review of Political Thought*, 2014. 査読あり、219-234 頁。

菅原光「マジックワードとしての「立憲主義」 脱魔術化と再生の試み」(松田宏一郎、五百旗頭薫編『自由主義の政治家と政治思想』中央公論新社)査読なし、2014 年、53-85 頁。

菅原光「「文明開化」と「進化論」」(黒住眞編『岩波講座 日本思想』第四巻)査読なし、2013 年、143-168 頁。

菅原光「[書評] 真辺将之著『西村茂樹研究』」(『日本歴史』第 771 号、吉川弘文館)査読なし、2012 年、123-125 頁。

〔学会発表〕(計 5 件)

菅原光「明治日本と「立憲主義」」(2015 韓・日政治思想学会共同学会議、2015 年 12 月、19 日、成均館大学(韓国))

菅原光「19 世紀日本における「進化論」受容の諸問題」(第 3 回東 Asia 若手歴史家 Seminar、2015 年 8 月 12 日、ソウル大学(韓国))

菅原光 *Utilitarianism and Confucianism in Japan*. (EAJS 国際会議、2014 年 8 月 29 日、リュブリャナ大学(スロヴェニア))

菅原光「他文化主義と言語という問題」(2013 日・韓政治思想学会共同学会議、2013 年 7 月 7 日、法政大学)

菅原光「記紀神話と公共性 「古層論」の再検討を中心に」(韓国古代史と公共性研究第一次年度学会議、2012 年 11 月 23 日、韓国学中央研究院(韓国))

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菅原光 (SUGAWARA HIKARU)  
専修大学・法学部・教授  
研究者番号：90405481

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：